児

蔵 君 君

有 Ш

村徹 信

作 作 詇 Ш

の夢高く

楡陵の蒼空に銀月冴えてゆりょう そら っきぎ学の古鐘の沈みゆき

の群れの片影もなし

呼青春

楡の花散る学都にぞ理想のあとに憧憬れて のあとに憧憬れて

啓さ 綺<sup>は</sup>花な !を流して逝く水に を求む若人は

落葉踏みゆく雄き子は 沈黙の原始に散りしける

北斗は遠

恐く七星清!

五.

「妄執」

の現世を見下して

三年の絢夢に涙する

十九の春を嘆くなり

牧ま 場ば õ 緑草踏みしだき

うち振る鞭の音も高 栗毛の駒に鞍置きて 駒に くらまして

凩がらし

さへも絶えし真夜に

疎林のほとり夕陽は落ちてゃり

四

希<sub>で</sub>望み の大空を朗らか ζ

白雲流れゆく手稲山静か寮歌を歌ひつ眺むれば 寮歌を歌ひつ眺む

震はせ乍ら橇唄は

銀巾 雪き

「に連なる曠野の静寂

涯なく白き石狩のはてしるいとかり

神秘の闇

を縫ひてゆく

永遠なる生命の証 なり

瞳に燃ゆる紅焰は

真実一路の迪恵ぬ

「意気」と「血潮」に生くる子のいき